

地理資料シリーズ

チェチェン問題

【写真解説】ロシア軍がチェチェンを攻撃した第1次と第2次のチェチェン紛争により、共和国の首都グロズヌイの主要部は廃墟同然となった。ロシア政府も、この都市の復興は困難とみて遷都を真剣に検討しているほどだ。共和国では2002年9月までの3年間に6万～8万人の住民が死亡あるいは行方不明となり、20万以上の人々が難民として外に逃れた。それでも首都グロズヌイには、逃げ場のない人々が今も生活インフラが破壊された状況のもとで、戦争の不安に怯えながら厳しい生活を送っている。俄が作りのパズールでは、パン、チーズ、野菜、タバコ、日用雑貨などが細々と売られている。生活物資は共和国の地方やロシアから不定期に運ばれてくる。
(写真 村田信一／ジオスコープ)

チェチェン共和国はロシア連邦の一部で、ロシアの南部、北カフカスに位置しており、面積は四国ほど、首都はグロズヌイである。人口はソ連時代には約100万であったが、チェチェン紛争で移住、難民が増え、現在は80万人以下。イスラム系のチェチェン人を中心にロシア人など多民族が住んでいる。18世紀にロシア帝国のエカテリーナ2世がカフカスへの侵攻を始め、19世紀にはロシア帝国の南下に対して、チェチェン人のシャミーリを指導者にカフカス人が激しい闘争を25年間続けたが、1859年チェチェンはついにロシアに併合された。ソ連時代にはシャミーリは「反動的民族主義者」の烙印を押されたが、カフカスでは英雄視されていた。チェチェン人は1943～44年に「ナチスに協力した」としてスターリンにより民族ごとカザフスタンに強制移住させられ多数の死者が出たが、フルシチョフ時代の1957年に帰還が許された。このような歴史的背景があるため、チェチェン人の多くがロシアからの独立を切望し、ソ連邦崩壊直前の1991年10月にドゥダエフ将軍を大統領に選んで独立国家を宣言した。しかしモスクワは独立を認めなかった。その理由は、第1に、多くの民族共和国を擁するロシア連邦は、独立を認めると連邦が崩壊するという懸念を中央政府は抱いている、第2に、チェチェンはエネルギー輸送、交通運輸の要衝の地であり、ロシア南部の安全保障の面からも戦略的に重要な拠点でもある、というものである。

こうしてソ連邦が崩壊して以来、独立運動と、それを抑えようとするロシア中央との闘争が続いている。93年のロシア最初の議会選挙もチェチェン共和国はボイコットした。これに対してロシアの支援で94年に親ロシア派の暫定評議会が政府の樹立を宣言したがドゥダエフ大統領は国家総動員法で対抗、94年12月にエリツィン大統領はロシア軍をチェチェンに投入して「第1次チェチェン紛争」が起き、親ロシア政府と独立派

の泥沼の内戦状態に陥った。95、96年にはロシア南部でチェチェン武装勢力による病院占拠事件も起きた。その後、96年ドゥダエフ没後、同年8月、レベジ安全保障会議書記の主導でチェチェン穏健派のマスハドフ暫定政府首相との間に独立問題を棚上げして和平合意が成立し、翌97年1月にロシア軍は撤退した。しかし99年8月から9月にかけてチェチェンのイスラム過激派が活動を活発化、モスクワその他の都市でアパートなどの連続爆破テロが起き300人以上の市民が死亡した。ロシア政府はチェチェン勢力の仕業として99年9月に再び武力攻撃を開始、「第2次チェチェン紛争」が起き、2000年2月にはロシア軍は首都グロズヌイの制圧宣言をした。99年8月に首相になったブーチン氏はチェチェンに対する強硬姿勢で国民の支持を獲得して大統領に当選した。

その後、中央政府はアフマト・カディオフ氏をチェチェン行政府長官に任命し、03年3月には住民投票で共和国憲法を採択し、議会選挙、大統領選挙を実施したいと考えている。しかしバサエフ野戦司令官など約3000名といわれる過激派はテロ活動を継続、02年10月にはグロズヌイの内務省庁舎で爆破テロ、モスクワの劇場でも占拠事件が起き観客約130名と武装勢力41名が死亡、02年12月末にはグロズヌイの行政府庁舎爆破テロで55名が死亡した。ロシア政府はチェチェン過激派の活動を、民族運動としてではなく、アルカイダやビンラディン氏などと結びつけた国際テロ活動と規定している。西側はロシア政府のチェチェン政策を、一般住民を犠牲にするものと非難してきた。しかし、2001年9月11日の米国における同時多発テロ事件以来、米国はロシアなど各国と連繋して反国際テロ活動を強化、チェチェン問題に関するロシア批判の声も後退した。テロ活動が続く中で、ロシア政府も国際社会も問題解決に苦慮している。(青山学院大学教授 袴田茂樹)